

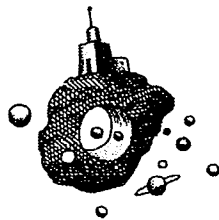
アショーカー王と平和思想 増原良彦

「平和思想」なるものは、まことにパラドクシカルである——。わたしは、この小論を、そのようなわたしの個人的感想でもってはじめたい。

「平和思想」がパラドクシカルであるのは、まず第一に、現実社会が平和な状態にあつては、人間は「平和思想」に関心を示さないからである。したがって、平和な状態にあつては、有力な「平和思想」は形成されない。有力な……というのは、のちの人類の指標となるような思想といった意味である。平和な社会は、「平和思想」にとって不毛の土壌である。

逆に、戦乱の時期にあつて、有力な「平和思想」が育つかといえ、それも否定的である。残念ながら、「平和思想」には平和をもたらす力がない。いや、「平和思想」にかぎらず、あらゆる思想に現実を変更させる力はないだろう。

われわれはいくらオブティミズムになつても、「思想」のパワーをそこまで認めるわけには行かない。戦乱を收拾できるのは、大きな武力である。そして、戦乱の時期にあつて待望されるのは、その武力であつて「平和思想」ではない。「平和思想」は、戦争状態にあつてはむしろ敬遠される。「平和思想」にとって、戦乱の時代はまた不毛の時期であ



る。

平和の状態にあっても、戦乱の時代にあっても、不毛なるもの——それが「平和思想」である。そこに「平和思想」の大きなパラドックスがある。

1 仏教の平和思想

もう少しつづける。

わたしはいま、「平和な状態」と言った。じつは、平和の状態には二種ある。

一つは、小国が分立し、勢力が均衡している状態である。もう一つは、この均衡状態を破って、大国が出現し、この大国が弱小国を併呑して行く。この過程においては戦乱状態になるが、やがて大国が安定し、大国によって弱小国が支配される。その支配—隷属の関係によって社会が平和の状態になる。そのような平和状態もある。

後者の、大国の支配による平和状態の典型は、パックス・ローマーナ (Pax Romana ローマの平和) である。前一世紀末のアウグストゥスの時代から五賢帝時代を含む約二百年間、ローマは黄金時代であった。そしてこの期間、ローマ

帝国の勢力は辺境の地域にまで及び、国内の秩序も比較的安穩に保たれていた。世界は、ローマ帝国の支配によって平和であった。これが「ローマの平和 (パックス・ローマーナ)」である。

余談であるが、十九世紀の末に日本が世界に向かって門戸を開いた時代は、「パックス・ブリタニカ」の時代であった。大英帝国が世界を支配し、世界の秩序が保たれていた。そして、われわれが生きてきたつい昨日までの世界は、「パックス・アメリカナ」あるいは「パックス・ルッソ・アメリカナ」の時代であった。アメリカ帝国による世界の支配、あるいは米ソ世界戦略体制の下で、局地戦争はあったけれども、全体として世界は平和を保ちつづけてきた。さて、その「パックス・アメリカナ」ないしは「パックス・ルッソ・アメリカナ」は終わったのであろうか……？ わたしには、世界はいま大きな転回点にさしかかっているように思えてならない。だが、これは、この小論の範囲外の問題だ。あわてて本題に戻す。

と言つても、もう少し余談をつづけることを許されよ。じつは、いま述べた「パックス・ローマーナ」に似ているの

が、この小論の主題であるアシヨーカ王のマウリヤ帝国である。あの時代、マウリヤ帝国の支配によって、インドは平和であった。だから、われわれはそれを、

——「パックス・マウリヤナ」——

と呼ぶことができるだろう。そして、この「パックス・マウリヤナ」の構造を明確にすることが、アシヨーカ王の平和思想を明らかにすることになり、それがこの小論の目的である。だが、それについては、本題であるが故に後に譲ろうと思う。

余談をつづけると言ったのは、別のことだ。すなわち、「パックス・ローマーナ」との関係で、脱線を承知であえて言及しておきたいことは、キリスト教の創始者であるイエスの思想活動が、この「パックス・ローマーナ」を背景に展開されている点である。イエスは、「ローマの平和」が、ほかならぬユダヤ民族にとっての隷属であることを見抜き、「平和」(その実体は帝国主義支配である)を否定する発言をなしている。

「われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらず、反つて剣を投ぜん為に来れり」(「新約聖書」「マタ

イ伝」第二〇章)

ここにキリスト教の「平和論」の出発点がある。もちろん、イエスは、

「カイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ」(「マルコ伝」第二章)

と、政治の世界(「カイザルの物」と宗教の世界(「神の物」との分離を宣言している。したがって、イエス自身には政治の世界の問題である「パックス・ローマーナ」への関心はなかったにせよ、それを所与のものとして肯定する気もなかったはずだ。むしろ彼は、「平和」を否定する。「平和」の実体が「パックス・ローマーナ」であるかぎり、それはイエスにとつてはどうでもいいことであった。どうでもいい——というところに、キリスト教の「平和論」の原点があるように思えてならない。わたしはそう見るのである。

その意味では、「パックス・マウリヤナ」の下で仏教の「平和思想」がどうなったか……？ われわれはそれを問題として残しておこう。

さて、ようやく話を元に戻すことができる。われわれは、平和の状態に二種あることを知った。一は、小国分立・勢

力均衡の平和であり、他は大国支配・小国隷属の平和である。これまでは後者についてコメントしてきたが、以下に前者についてコメントを加える。

じつをいえば、仏教の開祖である釈迦¹が活躍した時代は、この小国分立状態のインドであった。釈迦の時代²のインドにあつては、カーブル峡谷からゴダバリ河にかけて十六大國が成立し、互いに対立抗争していた。そして、十六大國が次第に統合されて四大國となり、釈迦の入滅の前後のころはマガダ國とコーサラ國の二大國が対立する情勢になつてゐた。要するに、釈迦の時代のインドは、小国分立であり、勢力均衡によつて平和が保たれてゐた時代である。

仏教の「平和思想」は、もしそのようなものがあるとするれば、それはかかる時代背景の下で読み取られるべきである。わたしはそう主張したい。時代背景を考慮することなく、仏教の「平和思想」を論ずるのは、非常に危険である。さて、それでは、仏教に、というより釈迦に「平和思想」はあるだろうか……？　じつをいえば、釈迦には「平和思想」はなかつた。わたしはそう考へてゐる。なぜなら、釈迦の時代背景が、「平和思想」を要請してゐなかつたから

である。

周知のごとく、釈迦は釈迦國の太子として生まれ育つた。しかし彼は、みずからの意志でもつてリアル・ポリティーカー（現実政治家）の地位を放棄し、宗教者となつたのだ。その彼に、現実政治のうちで形成される積極的な「平和思想」を期待するほうが無理だ。彼の思索は徹底して非政治的な問題——すなわち、個人的な魂の問題に向けられてゐた。だから、彼の思想体系のうちに「平和」の問題が組み込まれてゐても、それはいわゆる、

「心の平和」

であつて、われわれのいう「平和思想」ではなかつた。釈迦の思想に、換言すればオリジナルな仏教思想に、「平和思想」はなかつた。

しかし、たとい釈迦自身が「平和思想」への関心を示さずとも、時代の要請があれば彼はそれに応へてゐたはずだ。大思想家は、わたしに言わせれば、本質的に「時代の子」である。時代が直面する思想問題に取り組んでこそ、大思想家たりうるのだ。したがつて、釈迦の時代が「平和思想」を要請していれば、釈迦は必ずそれに応じてゐたであらう。

われわれはそう信じてよい。けれども、いかんせん、時代

は「平和思想」を要請してゐなかつた。小国分立、勢力均衡の時代背景のなかで要請されてゐる思想は、むしろ「発展の哲学」「覇道の思想」である。勢力均衡は一時的現象であるから、そこでは誰もが覇者た然とする。それを権威づけるのが、時代の流れに乗つた仕事なのだ。

ただし、釈迦の思想のうちには、そのような覇道の権威づけはない。かえつて彼は、覇道を警めてゐるようだ。「マハーパリニッバーナ經」（第一章1-5）の記述によると、マガダ國王アジャータサット王が、ヴァッジ族に戦争をしかけることの可否を釈迦に尋ねた。それに対して釈迦は、むしろ戦争をしかけぬほうがよろしかろうと暗示してゐる。その意味で、釈迦は平和主義者であつたと思われる。

だが、平和主義者が「平和思想」を提唱できるかどうかはわからない。釈迦は平和主義者であつたが、釈迦には「平和思想」はなかつた。わたしは、そう断言しておきたい。釈迦はもともと、政治思想に関心をもちなかつたからである。

「平和思想」は、「パックス・マウリヤーナ」という現

実の下で、はじめて意味をもつのである。

2 アショーカ王

アショーカ王は、マウリヤ王朝第三代の王であつた。

マウリヤ王朝の始祖は、チャンドラグプタ王。前三一七ごろ、彼は卑賤の身ながらインドの西北で挙兵し、同地域のギリシアの軍事勢力を一掃し、兵をインド中原のマガダ地方に進めた。そして、当時マガダ地方を支配してゐたナンダ朝の軍勢を破り、みずからマガダ國王となりマウリヤ朝を創始した。

このチャンドラグプタ王を補佐したのは、名宰相のカウティリヤ（別名チャーナキヤ）であつた。カウティリヤには、政治・経済・軍事を論じた有名な『カウティリヤ実利論』がある。この書名は、しばらく読者の記憶にとどめておいてほしい。

チャンドラグプタ王はある時期に退位し、王位を子息のビンドゥサラーに譲つた。そして、ビンドゥサラーの王位を継いだのが、アショーカ王である。

だが、アショーカ王は、すんなりと王位に即いたのでは

なかった。伝によると、彼は父王「ビンドウサーラ」に疎まれていたという。父王に愛されていないことを知っていたアシヨーカー太子は、身の危険を感じて遠くタクシャシラー（現在のバキスタン北部の地）に逃げた。あるいは、タクシャシラーの地で反乱が起きたため、父王がアシヨーカーをタクシャシラーに——わざと危険の地に——派遣したのだ、とも言われている。いずれにしても、アシヨーカー太子とビンドウサーラ王とのあいだに反目があったことは確実である。

その反目の原因は何か？

それは定かにはわからない。が、わたしは、アシヨーカーのカーストに関する問題だと推理している。

アシヨーカーの母は、チャンパー出身のバラモン女性であったとされている。父のビンドウサーラは、初代のチャンドラグプタが「卑賤の身」であったから、やはり「卑賤の身」であつただろう。カースト的には、シュードラ（肉体労働者階級）に属していたと思われる。だとすれば、父親よりも母親のカーストが、はるかに高い。インドにおいては、これはよろしくないものであつて、そのあいだに生まれ

た子のカーストは、アウト・カースト（カースト外の賤民）とされてしまう。アシヨーカー王はアウト・カーストの故をもつて、父王に疎まれていたらしい。

この推測を裏づける証拠は、他にもある。アシヨーカー即位後の出来事であるが、大臣たちが彼の命令を無視した。三度にわたって自分の命令が無視されたとき、怒った彼は五百人の大臣の首を刎ねたという。あるいは、後宮の女官たちが庭園のアシヨーカーの樹（無憂樹）の枝を折り、花を摘んで捨ててしまったとき、彼は五百人の女官を焼き殺したという。

もつとも、これは作り話である。しかし、作り話にしても、国王の命令を無視する大臣たちがおり、国王を嘲笑する——アシヨーカーの樹は、その名称の故にアシヨーカー王のシンボルであつたと思われる——女官たちがいたのである。彼らは、アシヨーカー王がアウト・カーストであるが故に、これを蔑視していたにちがいない。一方、それ故にアシヨーカー王は残忍さを発揮した……。それが、この作り話の語っているところであろう。

タクシャシラーの辺境の地に駐留していたアシヨーカー太

子は、父王の病気の報に接するや、急遽、首都のバータリブトラに帰って来る。そして、長兄のスシーマ太子以下十九人の異母兄弟を殺戮した。ビンドウサーラ王に百人の王位継承者がいたが、アシヨーカー太子は自分の競争相手を全部殺してしまったのだ。そのようにして、彼は王位を手に入れ、マウリヤ王朝の第三代皇帝となった。

残忍なるアシヨーカー——われわれはそういった印象をもつ。しかし、その残忍さは、同時に仏教への転向のエネルギーとなつている。前半生における残忍さが、後半生の「平和」を引き立てるわけだ。ここところは、そういう筋書きと読んでおきたい。

即位後のアシヨーカー王の統治行為は、非常に目を見張らせるものがある。

彼は、父祖が築いた大領土を保持継承したばかりでなく、インド東南岸のカリンガ国を平定して領土に加え、西方、北方の近接地域を征服して、大帝国をつくりあげた。そして、この広大な領土を、中央直轄地と地方総督によって統治される西北・西・東南・南の四地方に分け、各地に地方総督を輔佐する多数の行政官を送り込んだ。しかも、アシ

ヨーカー王は、これらの役人を統制監視するためにスパイを送り、数年ごとに巡回監視官を派遣する制度を設けている。もちろん、アシヨーカー王は、強大な軍隊を擁していた。われわれはその点を見落としてはならない。

アシヨーカー王は政治に熱心であつた。王は臣下たちに、次のように命じていた。

「わたしが食事中であれ、後宮にいるときであれ、内房であれ、馬場であれ、乗輿の上であれ、あるいは遊園にいるときであれ、いつでも、どこでも、上奏官は人民に関する政務をわたしに奏聞せねばならない。そうすれば、わたしはどこにしようと、即時に政務をさばくであろう」

3 仏教への帰依

そのアシヨーカー王が、のちに仏教に帰依した。

アシヨーカー王の仏教への帰依の動機に関して、二つの伝説が語られている。

アシヨーカー太子が王位を手に入れるために、自分の異母兄弟を殺しはじめたとき、彼の父王の妃のスマナーがチャンダーラ（アウト・カーストの賤民）の村に逃げて難を避け

た。彼女は身籠っており、チャンダーラの村で男子のニグロダを産む。したがって、ニグロダはアショーカ王の異母弟にあたるが、彼は七歳のとき出家して仏教教団の僧となった。後年、パトリプトラの街を托鉢に歩くニグロダ比丘の姿を見て、アショーカ王は彼に帰依し、そして仏教教団に帰依したというのである。

もう一つの伝説は、アショーカ王はギリカという名の狂暴なる死刑執行人を雇っていた。ギリカのために家を建て、このギリカの家に迷い込んだ者を、ギリカに自由に殺させていた。ところがある日、一人の仏教僧がギリカの家に迷い込み、ギリカによって地獄の責め苦を受ける。けれども、僧は泰然自若としていて、ギリカは殺すことができない。ギリカに呼ばれてギリカの家にやって来たアショーカ王は、そこでギリカを殺して僧に帰依した。

前者は『マハーヴァンサ』が伝える伝説であり、後者は『アショーカ・アヴァダーナ・マラー』が伝えるものである。伝説としては、わたしは後者のほうがおもしろいと思う。刑罰の執行は王権に属するものであり、ギリカはその王権の象徴である。しかしながらアショーカ王は、その

して国家が存立するか否か、議論の別れるところだ。しかも、大多数の見解は、交戦権を国家必須の権限と見るはずだ。その点に関しては、われわれは、クラウゼヴィッツの古典的定義を思い出しておくだけでよい。すなわち、彼は、「戦争は政治におけるとは異なる手段をもってする政治の継続にほかならない」

と断定し、「そこで戦争は、政治的行為であるばかりでなく、政治の道具であり、彼我両国のあいだの政治的交渉の継続であり、政治におけるとは異なる手段を用いてこの政治的交渉を遂行する行為である」と解説している（クラウゼヴィッツ『戦争論』第一篇第一章。篠田英雄訳による）。アショーカ王のカリンガ国征服戦争は、「彼我両国のあいだの政治的交渉の継続」であった。われわれはそう断言しておく。

だが、その戦争は、一方において悲惨な結果をもたらした。カリンガ国の兵士の十五万人が捕虜となって他の地方に移され、そこで奴隷とされた。また、捕虜となった十万人は、その場で殺された。戦闘で死んだ兵士は、その数倍であったと想像される。戦闘員ばかりでなく、多くの非戦

王権を制限して仏法に帰依したわけである。このところに、アショーカ王の「平和思想」を分析する一つの鍵がある。だが、それについては、あとで検討しよう。

アショーカ王が仏教に帰依した動機ないしは契機として、史実的にはカリンガ国征服戦争がある。多くの歴史家は、この事件を重視している。

アショーカ王の即位は、紀元前二六八年前と推定されている。即位後十年ほどして、前二五九年前、彼はインド東南岸のカリンガ国への征服戦争を起こした。戦争はアショーカ王の圧倒的勝利に終わり、マウリヤ朝はカリンガ国を自己の領土として併呑した。

戦争そのものは、ありきたりな征服戦争であった、と断言してよいだろうか……。現代的視座に立つならば、征服戦争は起こしてならぬものと断罪される。けれども、古代にあって、征服戦争にかぎらず戦争そのものが、国家に必要な手段として容認されていた。いや、それは古代にかぎったことではない。現代にあって、「戦争」そのものは肯定されているはずである。戦争を放棄している『日本国憲法』のほうが、世界史的には例外である。交戦権を放棄

闘員が殺された。

となると、政治的手段としての戦争の有効性が問われるべきであろう。有能な政治家であったアショーカ王は、政治的手段としての戦争の有効性を疑ったようだ。戦争は、必ずしも最上の手段ではない。アショーカ王はそう考えたらしい。

もちろん、そこには計算がある。いくら戦争が悲惨だといっても、戦争を廃絶して国家の経営が成り立たぬようであれば、依然として戦争という手段に頼らざるを得ない。アショーカ王が戦争を廃絶して、仏法による統治に切り換えた裏には、それでやって行けるという計算があった。そして、その計算の根拠は、例の、

「バックス・マウリヤーナ（マウリヤ王朝の平和）」である。それがあればこそ、「平和の政治」が可能であったのだ。

けれども、じつをいえば、これは同語反覆である。そうでしょうよ、「アショーカ王の平和」が可能であったのは、「マウリヤ朝の平和（バックス・マウリヤーナ）」があったからだという発言は、まさしく同じことばの繰り返しだし

かない。しかし、この繰り返しの中に、アショーカー王の「平和思想」の特性があるわけだ。だが、それについては、われわれは次節で検討を加えよう。

では、なぜ、アショーカー王は仏教に帰依したのであるのか？

仏教は、ある意味で、「平和」の教を説いている。

——「われ罵られたり、われ害されたり、われ敗れたり、われ強奪されたり」という思いをいだける人には、怨のしずまることなし。

——「われ罵られたり、われ害されたり、われ敗れたり、われ強奪されたり」という思いをいだかざる人には、怨しずまる。

——およそこの世において、怨は怨によりてしずまることなし。怨をすてこそしずまるなれ。これ不変の真理なり。

——すべての者は暴力におびえ、死をおそれる。己れの身にひきくらべ、殺すべからず、殺さしむべからず。

——すべての者は暴力におびえ、命をいとしむ。己れの身にひきくらべ、殺すべからず、殺さしむべからず。

彼はそれをうまく利用（活用）したのである、と。そう考えたほうが自然である。

とすれば、アショーカー王が別の理由で仏教に帰依していた、その別の理由とは何であろうか……？

それは、アショーカー王はバラモン教に帰依できなかったからである。いや、正確に言えば、バラモン教に帰依できないわけではない。バラモン教に帰依したところで、彼にはなんのメリットもなかったただけだ。それで彼は、バラモン教に帰依しなかったのである。

なぜなら、バラモン教は、カーストの差別を厳格にする宗教である。知識階級であるバラモンを社会の上層に置いて、厳格なカースト制度をつくって、ヴァイシャ（一般庶民）、シュードラ（肉体労働者階級）を支配する。自分たちバラモンが民衆を支配しやすいようにつくられた宗教が、バラモン教なのである。

アショーカー王は、前にも述べたように、カースト的には非常に低い出身だ。最低のカーストであるシュードラよりも、はるかに差別されたアウト・カーストの出身であったと想定される。そんなアショーカー王が、バラモン教に帰依

——生きとし生ける者は、安楽を欲す。もし暴力をもってこれに危害を加えなば、自己の安楽を求むるも、死後に安楽をえず。

——生きとし生ける者は、安楽を欲す。もし暴力をもってこれに危害を加えなば、自己の安楽を求めて、死後に安楽を得。

引用は「ダンマパダ」（渡辺照宏訳による）からである。

たしかにここでは、暴力が否定され、「平和」が希求されている。けれども、ここで言われている「平和」は、あくまでも個人レベルでの平和である。一方、アショーカー王が政治的手段として求めていた「平和」は、国家レベルでの平和であったはずだ。そして、国家レベルでの平和に対する発言は、前にも述べたように、仏教にはない。したがって、アショーカー王は、「平和思想」を求めて、あるいは「平和思想」の故をもって、仏教に帰依したのではない。わたしはそう考える。そう考えたほうが、筋が通ると思っっている。そして、わたしは逆の推理をしている。すなわち、アショーカー王は別の理由ですでに仏教に帰依していた。その仏教に、たまたま「個人レベルの」平和思想があった。

したところで、なんの利点もない。だから彼は、仏教に帰依したのであった。

仏教は、カースト制度に反対する宗教である。古代インドの諸宗教はたいいてい、カースト制度の上に載っかっているか、カースト制度と妥協していた。そんななかで、仏教はカースト制度に反対し、カースト制度を否定した例外的な宗教であった。アショーカー王は、だからこそ、仏教を選択したのであった。わたしはそうように推理している。

4 「バックス・マウリヤーナ」

アショーカー王はカリンガ国征服戦争のあと、戦争の悲惨さを反省し、二度と戦争を起こさぬことを誓う。そして彼は、「仏教のダルマ（真理）」によって政治を行なおうとした。この政治理想としての「ダルマ」を民衆に浸透させるために、領土の各地に詔勅を刻んだ巨大な石柱を建てた。また、国境地方には、多数の磨崖詔勅をつくっている。

もっとも、アショーカー王は仏教に帰依し、仏教を保護・援助したが、仏教だけを保護したのではなかった。バラモン教、ジャイナ教、アーギーヴィカ教といった諸宗教にも

経済的援助を与えた。その意味では、アシヨーカー王の宗教政策は「自由」と「寛容」の精神にもとづいていたわけだ。

さて、カリンガ国征服戦争のあとのアシヨーカー王の「平和政策」であるが、これにはどのような意味があるか……？ 彼は、二度と戦争を起こさぬことを誓っているが、その誓いの真意はどこにあるか？

アシヨーカー王に好意的に解釈すれば、彼は仏教に帰依したが故に平和主義者になり、「平和思想」を信奉した——というべきかもしれない。だが、その解釈はわれわれのとらぬところだ。なぜなら、アシヨーカー王は為政者であり、為政者はいかなる「主義の人」でもあることはできぬ。為政者が理想主義者であれば、理想と現実には必ず矛盾するものであるから、彼の行なう政治は破綻を来す。それ故、為政者はいかなる主義・理想を持てはならないのである。

先に述べたように、アシヨーカー王の祖父であったチャンドラグプタ王には、カウティリヤという名宰相がいて、王を輔佐していた。そのカウティリヤは、次のように発言している。

「……苛酷なる王杖（ダンダ）。権力、刑罰、あるいは暴力と訳せる）を用いる王は生類の恐怖の対象となる。軟弱なる王杖を用いる王は軽蔑される。適切に王杖を用いる王が尊敬されるのである。／＼実際、よく熟慮して用いられた王杖が、臣民に法と実利と享楽とをもたらすのであるから。欲望や怒りや軽蔑により不正に用いられた王杖は、林住期と遊行期にある人々をも憤慨させる。いわんや家住期にある人々の場合はなおさらである。しかし、王杖を全く用いぬ場合は、魚の法則（弱肉強食）を生じさせる。即ち、王杖を執る者が存在しない時には、強者が弱者を食らうのである。王杖に保護されれば、（弱者も）力を得る」（『カウティリヤ実利論』第一巻第四章。上村勝彦訳による）

カウティリヤは、適切な王杖（ダンダ）——王権、刑罰、それはイコール暴力である——の使用を言っているのであり、暴力の廃絶を呼びかけているのではない。暴力（王杖）がまったくなくなれば、社会は弱肉強食状態となり、かえって混乱するのだ。アシヨーカー王も英邁なる君主であったから、そのことはよくわきまえていたはずである。ひょっとしたら、『カウティリヤ実利論』は、彼の座右の書であ

ったかもしれない。

この適切なダンダ（王杖）の使用といったことを踏まえて、前に述べた「アシヨーカー・アヴァダーナ・マラー」が伝えるギリカの家の伝説を、われわれはもう一度検討してみよう。初期にあつて、アシヨーカー王は残虐なる政治を行なっていたらしい。『カウティリヤ実利論』がいう「苛酷なる王杖の使用」であつた。その「苛酷なる王杖」のシンボルが、死刑執行人のギリカである。アシヨーカー王はこのギリカを殺し、仏教僧に帰依を表明したが、ギリカを殺したということは、そのままダンダ（王杖）の放棄を意味しない。ダンダを放棄したら、その瞬間にアシヨーカー王は「王」でなくなる。そうではなしに、仏教に帰依したアシヨーカー王は、「苛酷なるダンダの使用」をやめて、「適切なダンダの使用」を心掛けたのであつた。それが、ギリカの伝説の意味するところである。われわれはそう読むべきだ。

したがって、カリンガ国征服戦争後に行なわれたアシヨーカー王による「戦争廃絶宣言」も、これは必ずしも国家の交戦権の放棄ではない。いかなる王も、王杖（ダンダ）

を放棄できない。王杖を手放せば、その瞬間に彼は王でなくなるのだから。アシヨーカー王が「戦争放棄の宣言」をしたことは、戦争によらずにマウリヤ帝国の維持・発展が可能になったからである。すなわち、「バックス・マウリヤーナ」の体制が出来上がったのである。

カリンガ国は、マウリヤ帝国に対抗する大勢力であつた。将来、カリンガ国によってマウリヤ帝国の基盤が崩される危険がある。そう見抜いたからこそ、アシヨーカー王は苦戦を承知でカリンガ国と交戦した。案の定、カリンガ国の征服は困難な戦争であつた。多くの人命が失われた。しかし、戦争はマウリヤ帝国の勝利に終わった。そうなると、もはや軍勢力は役に立たない。国内の治安を維持できる程度の軍勢力でよい。マウリヤ帝国の中央に軍勢力を温存し、その他の軍勢力はこれを廃絶する。そのほうが、国家の基盤は安泰である。そのような計算にもとづいて、アシヨーカー王は「平和」政策への転換を図つたのであつた。わたしはそのように推定する。それが、「バックス・マウリヤーナ」の意味である。

その点は、わが国の徳川幕府の政策によく似ている。徳

川幕府自身が編纂した歴史書である『徳川実紀』はこう述べている。

「君（＝家康）御若年の程より軍陣の間に人と成せ給ひ。柳風沐雨の勞をかさね。大小の戦ひ幾度といふ事を知らざれば。読書講文の暇などおはしますべきにあらず。また馬上をもて天下を得給ひしかどもとより生知神聖の御性質なれば。馬上をもて治むべからざるの道理をとくより御会得ましく。常に聖賢の道を御尊信ありて。おほよそ天下国家を治め。人の人たる道を行はんとらば。此外に道あるべからずと英断ありて。御治世の始よりしばし文道の御世話共ありけるゆへ。……」（東照宮御実紀附録卷十二）

つまり、武力によって天下を統一した徳川家康は、「馬上をもて天下を得」たものを「馬上をもて治むべからず」と悟り、文治主義に路線を変更した。『徳川実紀』は、それを家康の「英断」と称揚しているわけだが、なにそれは「英断」と言うほどのものではあるまい。天下統一の暁には、武断主義はかえって危険だ。武断主義の大前提は、「天下は回り持ち」の思想であり、回り持ちであるかぎり新し

い覇者によって天下は奪われる。それを避けるためには、

「天下は回り持ち」の思想を一掃せねばならず、そのためには武断主義を止めねばならぬ。そんなことは、家康ならずとも誰でも気づくことであって、家康に先見の明があったことにはならない。もつとも、豊臣秀吉にはそれが見えていなかったようで、彼は天下統一ののち朝鮮に兵を進めるといった武断主義路線を継続してしまった。それで秀吉は失敗したのだが、それからすると家康の頭の回転は褒めるべきか……。もつとも、家康は秀吉の失敗から学ぶことができたのであったが……。

閑話休題。アショーカー王が「平和の統治」を採用したのは、家康と同じく征服戦争の終了後であった。そして、家康が鎖国をして幕藩体制（「バックス・トクガワ」と呼べそうだ）をつくりあげたように、アショーカー王もインドに「バックス・マウリヤーナ」体制をつくりあげた。

それが、アショーカー王の「平和思想」である。したがって、それは、「平和思想」ではなかった。戦争を必要としない「絶対支配体制」に支えられた「平和的ダンダの使用」である。いささか酷に過ぎる評価であるが、われわれはア

ショーカー王の「平和思想」を、そのように論評しておこう。

5 「建設的平和思想」

あるいは、ひょっとしたら、アショーカー王自身が平和主義者であったかもしれない。その可能性は大にある。

だが、それはどうでもいいことだ。為政者が平和主義者であっても、そのみずからの信念・信条を発揮できるチャンスはほとんどないのだから。為政者は、必要とあれば暴力を揮（ふる）わなければならない。そしてその必要は、日常茶飯事的にある。

それよりは、問題は、アショーカー王と仏教の結びつきである。アショーカー王が仏教を採用してくれたことは、果たして仏教にとってよかったかどうか……。

仏教は、前にも述べたことだが、繰り返し言うておくと、「心の平和」を説く。それは、個人レベルにおいての一種の「平和思想」である。しかし、政治からずっと懸け離れたところで、政治と絶縁しているが故に主張できる「平和思想」である。が、とにかくにもそうした「平和思想」をもっているが、アショーカー王によって仏教は採用された。

それが、仏教にとって嘉すべきことか否か……。わたしは、手放しでは喜べないと思っている。

というのは、アショーカー王の平和政策は、「バックス・マウリヤーナ」に裏づけられて可能な政策であった。つまり、「絶対支配体制」が完備していたから、アショーカー王は平和政策を採用できた。だとすれば、被支配階級にとっては、それは抵抗の不可能性を意味する。つまり、マウリヤ王朝の政治は、下からの抵抗を封じることによって、上からの平和を押し付けたわけだ。それが「バックス・マウリヤーナ」の真の意味である。

そして、仏教は、その上からの平和の押し付けに一役を買わされた。そこにおいて、平和が強調されればされるほど、下からの抵抗権が抑圧される。そのような図式になってしまう。ほんらい政治と絶縁していた仏教が、みごとに政治的役割を背負わされたわけである。しかもその役割は、為政者の側に荷担し、民衆の側からの抵抗権を抑圧するものであった。わたしは、それを、仏教にとって不幸であったと考える。

キリスト教の場合は、「バックス・マウリヤーナ」に似

た「パックス・ロマーナ」の下にあって、支配者であるローマの側に立たず、被支配者であるユダヤ人の立場に立つて、「平和思想」が論じられている。イエスは、きつぱりと「平和」を否定している。当時の政治的状況にあっての「平和」が、上からの押し付けの「平和」でしかない以上、イエスはそれに反対せざるを得なかったのだ。

しかし、仏教には、そのような拒否権は与えられていない。アシヨールカ王のほうで、一方的に仏教を利用してしまったのだから、どうしようもないのである。そこに仏教の不幸があった。わたしはそのように見ている。

真の「平和思想」は、わたしは、下からつくりあげて行くものだと思う。それを、「建設的平和思想」と名づけようか……。「パックス・ロマーナ」「パックス・マウリヤーナ」のように、あるいは「パックス・アメリカーナ」「パックス・ルッソ・アメリカーナ」のように、上から与えられる「平和思想」は、むしろ真の平和を抑圧してしまうものだ。見せかけの「平和思想」であり、まやかしの「平和思想」である。

つまり、為政者は自分に都合のよい社会体制をつくる。

教の「平和思想」でなければならない。

だが、仏教は、これまでのところ、そのような「建設的平和思想」を生みだしていない。かえすがえすも残念である。

註

- (1) 「釈迦」なる呼称はふさわしくないと指摘する学者もおられる。釈迦が古代インドの部族の名称であって、個人名でないという理由からである。しかし、たいていの姓は氏族の名称である。「釈迦」の呼称を使用しても、絶対に混乱は起きない。それ故、わたしは「釈迦」を使用する。
- (2) 釈迦の時代をいつにとるか、むずかしい問題である。わたしはいちおう、紀元前五六六年前—紀元前四八六年前ごろとする通説に従っておく。

- (3) アシヨールカ王の伝記をしるした文献は数多い。山崎元一「アシヨールカ王伝説の研究」および定方晨「アシヨールカ伝説」を参考にすると、次のようなものがある。
- サンスクリット語のもの——

「ディヴィヤ・アヴァターナ」(三—四世紀ごろ)
「アシヨールカ・アヴァターナ・マラー」
「パリー語のもの」
「ディーバヴァンサ(鳥史)」(四世紀)
「マハーヴァンサ(大史)」(五世紀)

しかし、そのような体制は、必ずいつか下から突き崩される。その下から伸びてくる力を抑え込むために、下からの抵抗を封じ込めるために、為政者は絶対的支配体制をつくりあげる。それが、「パックス・マウリヤーナ」であった。そして仏教は、そのような「平和」のシンボルとして使われたのだ。それが仏教にとって幸いであったか、不幸であったか……。わたしは、文句なしに不幸であったかと思っている。言うなれば、仏教は権力のお先棒を担がせられたのである。それを喜んでいれば、仏教はいつでも権力の走狗であって、民衆の弾圧に加担するものだと思われてしまう。現代日本における民衆の仏教認識は、そのようなものだ。それは、仏教にとって不本意である。アシヨールカ王の「パックス・マウリヤーナ」のお先棒を担がせられたことは、仏教にとって大きな不幸であった。わたしはそう断定しておきたい。

仏教が、ほんらいつくるべきであったのは、「建設的平和思想」である。上から与えられる平和ではなく、下(民衆の側)からつくりあげて行く真の平和であり、そのような真の平和をもたらす「平和思想」こそが、ほんらいの仏

漢文のもの——

- 「阿育王伝」安法欽訳(三〇六年)
「阿育王経」僧伽婆羅訳(五二二年)
「雑阿含経」求那跋陀羅訳(四三五年—四四三年)(卷二十三および卷二十五に部分的に言及)
チベット語のもの——
タールナータ「インド仏教史」(二六〇八年)(第六章)

(ますはらよしひこ・宗教文化研究所所長)